

## フレデリック・アシュトンの作品に見られる チェケッティー・メソッドの影響

早稲田大学大学院 野本 昌

バレエ作品の中にはその振付家の信頼するメソッドを知ることによって、作品への理解が深まるものもある。そのような振付家とメソッドの関係の一つがアシュトン(1904-1988)とチェケッティー(1850-1928)である。

歴史的な背景としては、イギリスでは1920年代から80年代前半までチェケッティー・メソッドが優勢であったといえる。実際にチェケッティーがロンドンに滞在し教えていたのはバレエ・リュスを引退した1918年から25年までで、その間に多くのダンサーや教師を指導した。結果として当時のイギリスのダンサーたちはチェケッティー・メソッドによって訓練されるか、その影響を強く受けた教師から教えを受けたことになる。草創期のイギリスのバレエを支えたニネット・ド・バロワとマリー・ランバートもチェケッティーの弟子であった。しかし、フレデリック・アシュトンはチェケッティー自身に師事したわけではない。アシュトンがバレエを始めたのは22年でロンドンでスタジオを開いていたレオニド・マシンのもとである。アシュトン曰く「チェケッティーのポール・ド・ブラのスタイルとその美しさを学んだのはマシンからである。」(Vaughan, 1977, p. 7)その後マシンはロシアに戻るとき彼をランバートの所へ送った。そこで彼女はアシュトンの中にダンサーとしてよりも振付家としての才能を見出し、彼は26年『ファッションの悲劇』で振付家デビューを果たした。28年には一年弱、イダ・ルビンシュタイン舞踊団にダンサーとして参加しニジンスカの作品を仕上げている稽古の過程から多くを学んだといわれている。マシンもニジンスカもディアギレフのものにいた時代チェケッティーのクラスを受けていた。ド・ヴァロワとの最初の仕事は31年9月で、後に現在の英国ロイヤル・バレエ団の前身であるヴィグ・ウェールズ・バレエ団に入団することとなった。88年に亡くなるまでに80以上もの作品を残した。

アシュトンがチェケッティーのアンシェヌマンの多くを学んだのは、彼がロンドンを去るときマーガレット・クラスクによって引き継がれたスタジオであった。これらは週単位のパターンのセットで一週間のそれぞれ一日一日が異なったテクニックに重点を置くものとしてアレンジされている。それはブラシスの理論を発展させたものである。アシュトンは本来訓練のための動きであるクラスでのアンシェヌマンを振付の素材として作品創作の出発点とした。例えば『Valentine's Eve』(1935)のパ・ド・トロワはチェケッティーの土曜日のステップのいくつかをもとにし

て作ったものであるとPeggy van Praaghは語っている。(Vaughan, D., 1977, p. 115)これまでに指摘されてきたアシュトンがチェケッティー・メソッドの影響を強く受けている点をまとめると以下の通りとなる。・クラスでのアンシェヌマンの引用・アレグロにおける重心と方向の素早い転換・エポールマンの多用・イタリアン・シャッセや‘マーキュリー’アチチュードの使用

バレエとはかく脚(足)またはステップを中心に考えるが、それが関連する腕や手の配置やその描く軌道への関心に乏しければ、身体全体の調和のとれたバランスを歪めてしまうことになるのは明らかである。その調和をアシュトンは重要と考えていたので両方の腕の動きのバランスばかりでなく、腕と脚の間関係も考えたバランスを保つように細心の注意を払ったチェケッティーのポール・ド・ブラのようなエクセサイズを必要とした。チェケッティー・メソッドでのポール・ド・ブラのセオリーは「腕は踊りの中で絶え間なく動いている。それは常に体の他の部分、とりわけ脚とのコーディネートを考えながらでなくてはならない。(中略)舞踊において腕の動きは脚の動きと同様に重要で、その練習にどれだけ注意を払わなければならないかということを理解するのは容易なことである。」(Cecchetti, G., 1995, p. 23)とされており、ポール・ド・ブラの重要性を説いている。その中でチェケッティーのクラスやアシュトンの振付の中によく見られる腕のポジションが‘マーキュリー’アチチュードと呼ばれるイタリア派の特徴的なポジションでブラシスはこれをBolognaのマーキュリー像に由来するといっている。それはパロワがわざと異なった形にポーズをしてそれを直しているチェケッティーを撮った写真と『田園の出来事』(1976)のリハーサルでシーモアとダウエルを指導するアシュトンの写真の中に見る事ができる。それはアシュトンの晩年の作品であるので、彼が生涯変わることなくチェケッティー・メソッドを忠実に信頼していたことがうかがえる。

アシュトンは偉大な振付家との認識もあるが、幼い頃からバレエをしていたわけではなく始めたときにはすでに十八歳になっていた。ほぼ大人になって自らの意志でバレエを志した彼には、子供の頃から体に覚え込ませるように訓練を重ねたほかのダンサーたちとは異なった形でそのメソッドの意味を理解することもあったのではないかと思われる。自らがバレエを早く習得したいとの思いを強く持ったことからメソッドへの信頼は厚くなったのではないだろうか。それは多様な彼の作品に共通する特徴ということも可能である。

Vaughan, D. (1977), *Frederick Ashton and His Ballets*, London, Glasston, R. (1995), *The Influence of Cecchetti on Ashton's Work*, in *Following Sir Fred's Step Ashton's Legacy*, Cecchetti, G. (1995), *Manuale Completo di danza classica* ワガノフ, 梅村レイ子訳, 1951, バレエ教則本, 芸術社